



1



2



3



4

富士麓系鹿踊で演じられる所作「角入れ」

格子柄の袴や斜めに背負うささらなど、富士麓系には他の流派とは異なる特徴がある

案山子踊で実際に笠をくわえて踊るのは、現在ではかなり珍しい

写真提供 1 平尾裕美氏 2 縦糸横糸合同会社 4 高階麻衣氏

奥州遺産

— ときを越え

受け継がれるもの —

第137回

行山流都鳥鹿踊

(市指定無形民俗文化財)

胆沢南都田地区

水陸万頃とたたえられた胆沢の地で「五穀成就」と記された流しを背に、静かに、そして力強く舞う鹿の群れ。

都鳥鹿踊は、寛政5(1793)年に、平泉町の三代行水軒中津川清左エ門義胤から「行山流踊り」として伝授されたといわれている。地区内の伊勢神社にある行山躍供養碑には、嘉永4(1851)年に既に地域の伝統芸能として踊られていたことが記されており、歴史の長さを読み取れる。

胆沢地域で現在活動している二つの鹿踊団体のうち、一度も途切れることなく伝承されている都鳥鹿踊。現在は、市内のほか、平泉町の藤原まつりなどでも定期的に演舞を披露している。しかし、近年は、会員の減少によって少人数で演舞することも多く、同団体では、地区内外問わず会員を募集している。

豊かな水を湛える胆沢平野で稲作にまい進した先祖の供養と、人々の営みが続くよう祈りを込めて舞い、伝えていく。

広告